

藤沢周平

彫師伊之助捕物覚え

ささやく河



新潮文庫

さ さ や く 河^{かわ}

彫師伊之助捕物覚え

新潮文庫

ふ - 11 - 19



昭和六十三年九月十五日 印刷
昭和六十三年九月二十五日 発行

著 者 藤 沢 周 平^{しゅうへい}

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式 会社 新 潮 社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六一五一
編集部(〇三)二六六一五四四〇

振替 東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Shûhei Fujisawa 1985 Printed in Japan

ISBN4-10-124719-6 C0193

新 潮 文 庫

さ さ や く 河

彫師伊之助捕物覚え

藤 沢 周 平 著



新 潮 社 版

4130

目次

闇のヒ首	七
古いつながり	三
彦三郎の笑い	四七
見ていた男	七三
霧の中	一〇五
ひとすじの光	一二九
襲撃	一七〇
再び闇のヒ首	二二一
目撃者	二三〇

ひとの行方	二七一
浮かんだ顔	三〇八
人間の闇	三二六
殺意	三六七
三人目の夜	三九四

解説 関川夏央

さ
さ
や
く
河

彫師伊之助捕物覚え

闇やみのヒあい首くち

闇 の ヒ 首

道が暗くなると、伊豆屋いずやの店先に女が出て来て、軒行燈のきあんどんに灯ひをいれた。店の中にも灯がともった。だが、その男はまだ動く気配もなく、伊豆屋の方を向いて立っていた。

灯が入ったが、日が暮れてからは客は一人もなかった。伊豆屋は小売りを兼ねる小間物問屋である。色どりのきれいな袋物や、灯を照りかえす簪かんざしなどが、ひっそりと明るい店の中の灯にかび上がっているのを、男は伊豆屋からは斜め向かい側になる横山町三丁目の角に立って、じっと見つめている。

その男の姿を、店の中からも見ていた者がいたらしい。店の前を通る通行人の足もとぎれたころになって、男が二人店の外に出て来た。痩やせて背の低い方が、立っている男を指さし、大柄おおがらな太った男がうなずいた。

店の外に出て来た二人の男は、いったん家の中に入ったが、しばらくして今度は大柄な男が一人で出て来た。道を横切って男のそばに來ると、やわらかく声をかけた。

「ちよっと一杯やるか」

「……」

「ここじゃまずいな。川向うへ行こうや」

伊豆屋を見て立っていた男は、黙って大柄な男の顔を見つめたが、大柄な男が歩き出すとすぐにそのうしろにつづいた。

二人は暗くなった町の通りを抜けて、広小路に出た。両国橋にかかったところで、先に立っていた大柄の男が、うしろの男をふりむいた。

「ひどく息を切らしているじゃないか。病気かね」

「……」

「おまえさん、いつ帰って来たんだ？」

「四月だ」

「ふむ。ま、身体からだも弱るわな。長い島暮らしだ。いったい、何年になるのかな」

「……」

「十八年だよ」

大柄な男は、自分の問いかけに自分で答えて、感嘆するように言った。

「よく無事に帰って来られたものだ」

「……」

「しかし、どうしておれの店がわかった？」

大柄な男はちらとうしろを振りむいた。その眼めの光が鋭かった。

「誰だれかに聞いたのか」

「蛇の道はへびさ」

うしろの男は、ぽつんと答えた。齒が抜けているのか、言葉が隙間を洩れるようで、年寄りくさい声に聞こえる。伊豆屋の前に立っていた男は、事実年寄りだった。齡は五十半ばを越えているだろう。

大柄で太った五十近い男と、中背で痩せている年寄りは、橋をわたるとすぐに右に折れて、一軒の料理茶屋に入った。

「髪が、すっかり白くなったじゃないか」

酒をはこんで来た女が部屋を出て行くと、大柄な男はあらためてしげしげと年寄りを見ながら、そう言った。

「四月か。四月といえどもう三月も前だ。いや、わるい、わるい」

大柄な男はそう言うのと、白髪の男に盃を持たせて酒をついでやった。手真似で、膳の肴も喰えとすすめた。

明るい光の中で見ると、大柄な男は身体と釣合わないほどに柔和な丸顔をしていた。客扱いに馴れた商人の顔である。ただ、声が低かった。こそそとささやくようなしゃべり方をする。その低すぎる話し声が、やわらかい商人顔の裏に何かありそうな印象をあたえて損をしている。

「しかし、知らぬ顔の半兵衛を決めこんだわけじゃないよ。おまえさんが帰っているとは、知らなかったんだ」

それは嘘だつた。大柄な男には、ふだん小遣いをわたしている十手持ちの知り合いがいて、その筋から島から来る廻船に赦免されたどんな男が乗っているかを知ることが出来た。

白髪の男が帰つて来たときは、靈岸島の御船手番所わきまでこっそり見に行つて、男が赦免されて流罪地である島から帰つたのをたしかめている。

——それにしても……。」

いったい誰から聞いて、こんなに早くおれを見つけたものだろう、と大柄な男は不思議でならなかった。大柄な男は、島からもどつた白髪の男に見つかれるのを恐れていたが、少くとも一、二年は気づくまいと思つていたのである。不思議なだけでなく、気味わるくもあつた。蛇の道はへびだなんて、やろう、気取りやがつてと大柄な男は、顫える手で肴をつつき手酌で酒をあおっている忌まわしい男を見つめた。

「おまえさん、やつぱり病氣じゃないのかね。ずいぶんと手が顫えるね」

「……」

白髪の男は、ちらと大柄な男を見上げただけだつた。喉を鳴らして酒をあおつた。

「さつき、蛇の道はへびなんて言つたが、おれの店を教えたのは、まさか鳥蔵じゃあるまいな」

「鳥蔵？」

白髪の男は手をやすめ、口をあいて大柄な男を見た。

男の顔は、長い島暮らしを物語るように黒かつたが、肌には艶がなく、黒いままに青ざめて

見える。その青黒い顔色と、顔から頸^{くび}にかけて走る無数の皺^{しわ}がそれまで男の表情を隠していたようである。だが、鳥蔵の名前を口にしたとき、男の表情が少し動いた。

「おまえさん」

白髪の男は齒の隙間を洩れる、聞きとりにくい声で言った。

「鳥蔵の居場所を知ってんのかね」

「いや、いや」

大柄な男は、はげしく首を振った。男の様子で、自分の質問が見当違いだったのを知ったのである。

「知るもんか。あれっきりだ」

「そうか。知らねえのか」

白髪の男はがっかりしたようにうつむいたが、すぐにまた盃に手をのばした。うまそうに酒をすすり、舌を鳴らした。大柄な男は、その様子をじっと見ていたが、やがて自分も手の中の酒をぐいとあけると、盃を伏せた。

「六さん」

そう呼びかけた大柄の男の声が変わった。低いのは相変わらずだったが、声が濁ったのだ。

「おまえさんを連れてここへ来たのは、島帰りを祝って一杯やろうというわけじゃないよ。ましておまえさんが懐なつかしくて、ひさしぶりだと酒酌しやくみかわそうというわけでもない。そいつはわかつているな」

「……」

白髪の男は、ぽかんと口をあいて大柄な男の顔を見ている。相手の変化に気づいたのだ。「それじゃ達者でな、と言っておれたちは別れたのだ。それっきり、道で顔が合ってもそっぽをむく他人になる約束だった。そうだな」

「……」

白髪の男がうなずいた。

「そうよ。おまえさんが牢ろうに入ってくさい飯を喰おうが……」

と言って大柄な男は言葉を切り、あたりに耳を澄ます顔つきになった。だが狭い中庭をへだてた部屋に、にぎやかなひと声と三味線の音がしているだけで、二人がいる方の棟むねは静かだった。男は言葉をつづけた。

「牢に入ろうが、島にとばされようが、そいつは身から出た錆さびというものだ。他人のおれにはかわりがない」

「ああ」

白髪の男はうつむいた。その姿に押しかぶせるように、大柄な男は濁った低い声を、少し強めた。

「さあ、そこで聞かなくちゃならない。それだけわかっていて、なぜおれをたずねあてて来た？ え？」

「……」

「六さんよ。おれたちは赤の他人だぜ。あれからこつち、むかしもいまも何のつながりもない他人同士なのだ」

「それでも……」

白髪の男は顔を上げた。

「おれ、牢でずいぶんと責められたけどよ。あのことはひと言も言わなかったぜ」
「わかった、わかった」

大柄な男は、大いそぎで白髪の男に盃を持たせると、酒をついでやった。

「つまりはそういうことだな。おまえさんも、おれが懐しくて顔見に来たわけじゃない。脅しだ、な？」

「脅しだなんて、よしてくんな」

白髪の男は声を顫わせた。

「ただ、おれも島ですっかり身体をこわしちまってよ。稼かせぎ口ぐちをめつける前に、少しは身体を休めてえと思つてな。おめえに会えば、少しぐらいは金をつごうしてくれるんじゃないかねえかと思つただけさ」

「そのせりふが脅しだというんだよ」

と言つたが、大柄な男は怒つたようには見えなかった。懐ふところに手を突っこみながら、やわらかい表情で白髪の男を見た。

「それで？　金はいくら要いるんだね」

「そうさね」

それまで下うつむいて哀れっぽい様子をつくっていた白髪の男が、ちらと相手を見た。眼に狡猾な光が動いたようである。

「五両ほど、つごうしてもらえねえかね」

「五両かね」

大柄な男は笑顔になった。

「そりやまた、ずいぶんと遠慮したもんだね。といってもおれたちは赤の他人。相場はそんなところかも知れないがね」

しゃべりながら、大柄な男は懷から布包みを出して、白髪の男の膳の横に置いた。

「見たければあけて見てもいいが、中に三十両入っているよ。これだけあれば、へんな使い方をしなきゃ二、三年は寝て暮らせるだろうぜ」

「……」

白髪の男は金包みを手に持った。だが持ってみた重みで、相手の言うことに嘘はないと見きわめたらしく、すぐに畳にもどした。酒をのんでもほとんど変りがなかった男の青黒い肌に、このとき急に赤味がさした。思いがけない上首尾に興奮したのだろう。男の顔から胸もとにかけて、肌が真赤にそまった。

「すまねえな」

男は顫える声で言った。

「こんなに迷惑をかけるつもりじゃなかったのだ」

「まあ、いいじゃないか。大島まで行つて来たご苦労賃だ」

大柄な男は、おうように言った。

「だが、この手は二度は利^きかないよ、六さん。わかつてるだろうが、これつきりだ。あとは自分の才覚で何とかすることだ」

「わかつている」

男は殊勝な表情をつくつて言った。

「二度と迷惑はかけねえよ」

「その方が身のためだ」

大柄な男は、白髪^{しろがみ}の男をじつと見た。

「こっちは客商売。そうちよいちよい店の前に立ちん坊を決められたんじゃ商いにさしつかえるからね。そういうつもり^{つもり}の三十両だが、おれを甘くみない方がいい。今度商いのじやまをしやがったら、ただじゃ済まないよ」

「甘くみるなんて、とんでもねえ。こんな大金をめぐんでもらつて、ありがてえと思つてるさ」

「そうかい。じゃ、話がついたところで腰を上げるか。おまえさんと酒をのんでもうまくはないからね」

大柄な男は辛辣^{しんらつ}に言ったが、白髪^{しろがみ}の年寄り^{としより}はべつに言い返すこともせず、金包みを大事そ